



四国防災八十八話

第七十話 真っ暗な中の明かり

監修・著作：愛媛大学防災情報研究センター

作画：青江 美乃里（愛媛大学美術研究会）

今から110年ほど前の、明治32年のことです。

**別子銅山では、銅を作るため、
たくさんの方が働いていました。**

**でも、銅を作るときに毒ガスが出て、
木は枯れてやせ細り、
はげ山になってしまいました。**



「雨が降ったらどうしよう」

「山に木がないから、ひどいことになるぞ」

人々は口々に言いました。

ある時、人々の不安は的中しました。

大雨が降り、

はげ山を水が鉄砲玉のように流れて行きました。



山を下っていくうちに、
水はどんどん集まって、
大水になりました。

枯れ木をなぎ倒し、地面を砕き、
皆の家に襲いかかったのです。



皆は、慌てて逃げました。

怪我をしてしまう人もたくさん出ました。

「早くお医者さんに！」

皆は病院に向かいます。

「暗くて道が見えない」

「水も増えてきて怖いよー」



**家で、大水の様子を見ていた
村のお医者さんは、**

「きっと皆が怪我をしているに違いない。

行って手当てをしてあげないと」

**と思い、家を飛び出して、
胸まで浸かる程の大水の中を
病院へ急ぎました。**



病院へたどり着いたお医者さんは、
一生懸命、怪我人の手当てをしました。

でも、集まってきた村人の震えは止まりません。

「暗くて怖いよおーー」

と、小さい子供は泣き出してしまいました。

向こうからは、真っ暗闇で病院にたどり着けない人たちの

「助けてーー!!!」

という声も聞こえてきます。

「これではかわいそうだ。何か良い方法は無いかなあ。
あ、そうだ！」

お医者さんは良い方法を思いつきました。



**お医者さんは、
病院から包帯を集めてくると、
上から灯油を振り掛けました。**

集まった村人は、

「何をしているんだろう？」

と不思議そうに眺めていました。

そして・・・



お医者さんは、
“シュッ” とマッチに火を点けて、
投げ込みました。

“ボワッ”

灯油の染みた包帯が燃え上がり、
一瞬であたりを明るい色で包みました。



「あっちだ、明かりが見えるぞ!!」

**皆、病院の前で燃える火を道しるべに、
病院へと歩き出しました。**

**真っ暗闇で、
病院への道を迷っていた人たちは、
遠くに見える明るい火を見て、
顔を輝かせました。**



迷っていた人たちが、
次から次へと、病院にやってきました。

皆、明かりの前に集まります。

その明かりは、
不安で震えていた皆の心を照らすように、赤々と燃え、
皆を元気付けました。

お医者さんのちょっとした工夫が
村人を勇気付け、災害を乗り越えることができました。

その後、村人たちは、
「森を元に戻そう」と決心し、
緑の山々が戻ってきました。